



韓国からの米山記念奨学生スピーチ

米山記念奨学生 **金 静希**



この原稿は、2007年9月7日・8日の日程でホテル青森にて開催された第9回 ROTARY 日韓親善会議の2日目行われた「韓国からの米山記念奨学生スピーチ」として行われた金静希さんのスピーチの日本語原稿です。

* 当日の様態等詳細は <http://www.2750yoneyama.jp> よりご覧いただけます。

■自己紹介

こんにちは。私は金静希（キムジョンヒー）と申します。韓国のソウルから参りました。今は東京大学総合文化研究科の博士課程に在籍中で、日本の古典文学である『古事記』『日本書紀』を勉強しています。米山奨学生になって二年目で、世話クラブは東京日本橋クラブです。

最初、青森でのスピーチを依頼された時は、戸惑いを隠せませんでした。そんなに大勢の方々の前で何を話せばいいのか、そもそも口を切ることすらできないのではないかという不安があったからです。また、その時まで私にとってロータリーでよく耳にする「国際親善」や「世界平和」などの言葉はあまり肌で身近に感じられる言葉ではなかったですが、壇上に上がるとそういう話をしたほうがよいのではないかという重圧感があったからでもあります。感じたことも、思ったこともないことについてただどこかの倫理教科書に書いてあるからといって口だけで大げさに話しても意味ないことでしょう。それでは何を話せばいいのか、原稿を書き始めることもできずにそう悩み続けていました。結局、私に与えられた時間だから、私が話したいことを話せばいいという結論の中でやや恥ずかしいのですが、私と私の家族の話を、またこの米山奨学生になって感じたことをロータリーの理念の一つである「奉仕」と「他者理解」の面に即して話してみたいと思います。

■家族

うちの祖父は私が幼い時亡くなりましたが、生前は税金を多く納めた人として新聞に名を連ねるほどの財産を持つ事業家だったそうです。とても優しそうな印象の祖父は、貧しい人々を助けることにも熱心だったと聞いております。みんなが貧しい時代、うちに来るとご飯が食べられるとって家の廻りは、いつも人々で一杯だったそうです。母側の父は郵便局長だったそうですが、それほど裕福な家でもないのに、真冬、暖かい服を買うと町の乞食の服と着替えてきては、道端で寒がっている人が溢れているのに、自分独り暖かく過ごすことはできないと言ったそうです。白いご飯を食べたがる母が食卓のジャガイモや麦ご飯について文句を言うと、私たちが節約する分、他の飢える人々が助けられると言いながら、助けを求めに来た人々にお金やものを与えたそうです。また母はいつも何かの奉仕活動で家にいる日がほとんどない祖母を見ながらとても悲しかったと言ったりもしておりました。

母はこれを自慢話として私に聞かせたわけではありません。祖父と祖母がやったことは尊敬すべきことだとは思いますが、でも他人より自分の家族を先に考えるべきだと、家族を大事にする心を持つように聞かせた話なのです。幼い頃の私はそれに対して何の判断も下すことなく、そのまま母の話を聞いていました。

祖父が亡くなって、父は親しい友達に騙され、多くの財産を失い、またそのショックで倒れ七年間寝たきりの状態になりました。立ち直りはしたものの、その後もそれほど仕事をすることはできず、たびたび病院に向かう弱い体になりました。父が亡くなり、祖母も20年間アルツハイマー病で家族を苦しませた末に100才で亡くなりました。その間いつも人々で一杯だった家は親戚すら来ない家が変わっていきました。最初の何年間は何年間は人々が心配をしながら電話をしたり家を訪ねてきたりしましたが、本当に最初の何年間だけでしたね。うちに来

ると、アルツハイマーのため自分の排泄物を壁に塗る祖母のため家中が排泄物の臭いで一杯であり、家族は暗い顔をしてお客さんを心から嬉しく受け入れることが出来ませんでした。それを誰が見たがるのでしょうか。わかります。人々の心境は身にしみるほどわかります。しかし、人々の足が途絶え、親戚すら来なくなってからは、私はうちが人々から徹底的に棄てられたと思いました。

自分も病気を持っているのに、身体の不自由な人々や高齢者に対する奉仕活動で一生懸命だった母側の祖母が亡くなって、私は胸の中でこう叫びました。＜間違っただよ！自分の身と自分の時間を削ってまで人々を助けたって、その人々の感謝する気持ちがどれくらいだと思う？葬式場には何人が来た？人々はお金がある時だけ、自分の利益になる時だけ、自分が助けられる時だけ微笑んでくれるのだよ。もしお爺さんが人々を助けず、うちがまだ金持ちの家だったら、こんなに人々から目を背けられることはなかったのではないか。お婆さんが人々を助けたって私たち家族に結局何が残ったと思う？お爺さんもお婆さんも間違っただよ。＞幼い時は、何の判断も下さなかったのがこの時「間違い」という名を持つ判断がくつきりと私の胸に刻まれました。

■奨学生になってから

米山奨学生になってから私はロータリーの人々を一人一人みておりました。私が不思議に思ったのは、なぜみんな忙しい忙しいと言いながら委員会の仕事を一生懸命にするのか、なぜ自分の時間とお金を削ってまで赤の他人を助けようとするのか、胸の底から知りたい知りたいという気持ちに駆られました。たぶん、それには自分の祖父と祖母を理解したいという気持ちが働いていたためではないかと思われそうですが、それはともあれ、その答えを見出すにはそれほど時間が掛かりませんでした。

ある日のことです。日韓の歴史認識を巡る問題で両国家間で反韓・反日感情が高まっていた時、ロータリーでも我々に石を投げている国の学生たちになぜ我々が奨学金を支払わなければならないのかという声が出たそうです。一瞬、私は祖母の葬式の時の自分の姿を思い出しました。これはあの時の私の気持ちと似ていることかも知れない、こちらが何かをやったから何かを返してもらいたい、これほどやったのに、我々に目を背けるのか、また感謝どころか石だけ戻ってくるのか、そういう気持だったでしょう。

自分の頭の中で一気にいろいろな質問が飛び交いました。人々は何のために他の人々を助けようとしたのか、相手に対して何かの恩返しを願っていたのか、感謝する気持ちを必要としたのか、相手に何もかも必要としなかったなら何を残そうとしたのか、私に何が言いたいのか、必死に頭を抱えて考えぬいた末に、急に私は自分のことがすごく恥ずかしくなりました。それは答えが「私」にあることに気づいたからです。残そうとしたのは、いや残すべきなのは子供である私だったということに気づいたからです。祖父と祖母、そして多くのロータリーの人々は、口では直接言わなくても、是非を問う以前に、損得を考える前に、私に心を持つ人間になりなさい、自分から離れ、回りを見ると何が見えるのか、短い人生をどう生きるべきなのかを教えようとしたのではないのでしょうか。残すべきなのは心のある私という存在だったのに、それに気づかず、ただ目に見えることだけに気を捕らわれ、感謝しない相手だけが悪いと、そう思った私という人はなんて愚かな人間なのか、米山奨学生としての経

験は、私がいかに物事の表に気を捕らわれているのか、いかに相手を理解することが難しいのかを新たに認識するきっかけとなりました。

■他者を理解するために(1)－無知への自覚

みなさんはNHKで放送された「チャングムの誓い」というドラマを覚えているでしょうか。ドラマの中でチャングムが師匠に「私はうぬぼれていました」と言い、自分の医術に自慢していたことを反省する場面がありました。まさに私の姿だと思いました。その言葉が何日も頭の中から離れませんでした。私は長い間「分かる」「知る」という言葉のために、それが本当に可能であるかのように勘違いをしていました。世の中で「知って」「分かる」ことが可能なのは一つもないという自覚は、私を長い間苦しめましたが、そのため知ろうと努力する心構えを持つようにもなりました。

ある意味で「無知」への自覚の芽は私が日本語を学ぶようになった時に始まったものかも知れません。私は元々歴史学科の学生でしたが、授業の時、先生が『日本書紀』について『三国史記』『三国遺事』や中国の書物の記事を例にして『日本書紀』の間違いを一つ一つ指摘することを聞いて、日本も日本語も知らないのに、そう判断するのが可能なことかと疑問を抱くようになりました。人々は結局自分の立場でしか考えられないのではないかという気もしました。

ともかく、それがきっかけで日本語を学ぼうと決心し、日本語学科に編入することになりました。韓国で大学院に通う際に、今の指導教官である神野志隆光（こうのしたかみつ）先生の本に触れる機会がありましたが、それは書物の間違いを指摘するのではなく、その書物が何を語ろうとしているのか、テキストをテキストのまま理解しようとする立場で書かれたものでした。例えば、人に喩えると、人の表面ではなく、その人の話していることの内面に深く入り込んで、その人をその人のままで理解しようとする立場です。私にはとてつもなく難しく、不可能に近いことだと思われましたが、そうであるからこそ、やる価値があるのだと思い、留学を決めました。

今までの『日本書紀』の研究は他の国の「史書」と呼ばれている書物との比較研究を通して、または考古学的な成果を通して事実を突き止めようとする方法で研究が成されてきました。勿論、事実を明かすのはとても大事なことですが、『日本書紀』がほぼ同じ時期に書かれた『古事記』とは微妙に異なる話をするのを見ると、それぞれのテキストはそのテキストだけが持つ思想に基づいて屈折して作り出されているというのが正しい把握だと思われま。結局、客観的な歴史書はあり得ないという立場に立つと、古代のことはあくまでも、推測の領域でしか語れないという結論に至ります。そして我々はその推定の産物をまるで本当にあったかのような記述をした教科書で事実化された歴史を学ぶことになるのでしょうか。それをやりつづけて次の世代に何の意味があるのか、今の歴史教育は根っこから間違っているのではないかという気がします。我々が史書と呼ばれているものを歴史だといい、子供たちに教えること、またそれを何の違和感も無しに真実として受け入れている学生たち、このような教育には私の歴史だけあって、相手の歴史は存在しません。ここには自分だけが正しく、相手は間違いだという認識が最初から決まっているのです。このままでは、昨今の日韓の言い争いにも表れているような、相手を認めない態度が永遠に続くのではないのでしょうか。そ

ここで私は歴史分野では誰もやろうとしない方法、テキスト分析という研究方法で『日本書紀』を見ようとしています。

私が先生になったら、学生たちにこう言いたいのです。私は世の中のことが見当もつかないが、一つだけ分かっていることがある。それは私が分からないということを知っていることだ。歴史と呼ばれていることを事実だと思ふな、マスコミの話聞いてそれに追従して相手を判断するな。「伝統」や「教養」という言葉は近代の国民国家が作り出した言葉なのに、まるで遠くの昔からそれが存在してきたような錯覚の中で我々が彷徨っているように、我々は長い間築き上げてきた事実化された格好つきの「歴史」の中で翻弄されているのだ、世の中に私がいれば、相手もいる。私が作り出した歴史があれば、相手が作り出した歴史もある。相手について言う前に、まずは自分が分からないということを知覚し、複数の作り出された歴史をそのまま受け入れなさい、そう言いたいのです。

■他者を理解するために(2)－衝突と話し合いの場

日韓の歴史学界で、自らの歴史書が正しいと信じ込み、相手の歴史書を批判する研究が今後も後を絶たないとすれば、日韓の政治の世界や一般人の間でも様々な衝突の場が見られます。ロータリーの中ではすべてを政府の問題に還元し、さまざまな言い争いが表に浮かび上がるのを事前に押し伏せようとする姿が見えたりもします。それが正しいのかどうか私には判断が付きません。というのは、何かを言う時は、それを言う時と場合がふさわしい場面じゃないといけないし、聞く側と話す側の用意がきちんとできていないと衝突だけ招くということを感じているからです。しかし、去年、日韓親善委員会主催の交換学生たちが韓国訪問後書いた感想文を読んで、何カ所か？マークをつけるようになり、果たしてこのままで大丈夫なのかと心配になりました。

直接、学生たちの文章を引用してみます。「今の日韓の関係の悪さは、靖国神社のこのような昔のことが原因です。現代の私たちにとってはあまり関係がないと私は思います」、また他の人の文章です。「見た目とは裏腹に会話してみると、大変思慮深く、驚くほど立派な考えを持っていることに気づきました。それを最も強く感じた場面は「竹島問題」について語り合った時のことです。私は韓国人の生徒たちが熱く語り合っているのにひどく胸を打たれました」 また、違う生徒が書いたものです。「私はこれまで韓国に対し良いイメージはあまりありませんでした。それは、テレビでも放送されているように靖国参拝や竹島問題などで強い反日感情を感じていたからです」

ロータリーの皆さんが日韓親善のために敢えて目を背けようとしている問題に対して子供達は自分たちでその問題を巡って軋みあい、ぶつかり合っていたのです。感想文の書き方がそれほど具体的ではなかったため、相手に対してどのように理解し、どうやって仲直りしたのか私にはわからず、本当に子供たちが相手について理解したのかととても不安になりました。つい最近、あるところで、自分の専攻や現在の日韓関係についてスピーチをしたことがあります。そこでもいきなり怒り出した人があり困りましたが、子供たちが理解したなんて、この文章をどう受け止めればいいのか私には分かりませんでした。このまま大人たちが知らぬふりをしていいのかについても気になり始めました。

それで、みんな話をしながらない竹島問題について、本当は心の中でどう思っているのか

知りたくて、私が運営する韓国のクラブのサイトと、日本の学生たちが参加するサイトにこれに関わる自分の中間的立場を書いた文章を載せました。私はどっちの肩も持たないため、両方側から悪口を言われるだろうと覚悟はしていました。韓国側では他人を理解することがどれほど難しいことなのかについて言う人がいましたが、日本側では、私と親しい人が他の関連する問題を取り出して韓国政府に対する批判をし始めました。なぜ韓国側は穏やかな反応だったのに、日本側は怒り出したのか、普通なら韓国側がもっと熱くなったはずなのに…。理由を考えてみました。いろいろあるでしょうが、一番大きな理由は、韓国側のクラブはほぼネット上のつきあいだけですが、私が長い間、とても率直に公開日記を書きつづってきたところであるため、私という人間がどういう人間なのか少しは理解してくれたのではないかと、それに比べ、日本の友達とは仲のいい間柄ですが、結局、彼等とは表面だけの話し合いで心をうち解けて話し合ったことは一度もなかったのではないかと、私の思いが伝わらなかったのはそのためではないかと、そう思われました。

消えない喧嘩の種を抱えて時間が解決してくれることを待つのがいいのか、心をうち解けて話し合うのがいいのか、人間関係にとって正解はないと思います。ある時は前者が正解で、ある時は後者が正解でしょう。何がいいのかはすべて結果が物語ってくれるはずですが、ただ、今までの日韓の歴史からして様々な紛争の種が消えるには、待つことだけが得策ではないだろうと信じています。長い時間、根気強い努力、そして何よりも自分から相手に対して素直にならないと、話は前に進まないでしょう。

私はかわいい子供を見ると、手を振る癖がありますが、この間も、エレベーターの窓の外に見える子供に手を振ったら、その子供は私が今まで見たこともない嬉しそうな表情で思いっきり手を左右に振って答えてくれました。その時に感じた幸せというのは言葉で言い表せないぐらいのものでした。私が先に手を振ってなかったらあの子は私に答えてくれたでしょうか、私を幸せにしてくれたでしょうか、あの子供はその瞬間、私の耳元でこう囁いているような気がしました。ね、お姉さん、そのように素直になって心を思いっきり打ち開いて見せるんだよ。そうすると、お姉さんも相手も幸せになれるよ、と。

■ 目指すところ—価値のある人生

日本に来ていろいろなことを感じ取ったり、学んだりして本当にここに来てよかったと思いますが、母はいつも私についてわざわざ茨の道を選んで歩む子だと、なぜ苦勞しようとするのか分からないと言います。そして、年取ってみると分かるはずだと、人生がどれほど空しいものなのか、瞬く間に過ぎていく時間は、楽しく、やりたいことだけをやっても足りないのだと、一人で苦勞せずにお姉さんのようにいい人に出会って何の不自由なく毎日笑いながら暮らしてほしいと、そう言います。でも、どうでしょうか。富を持っていて、毎日が楽しくて、すべてが揃っているように見える幸せな家庭の人々は死ぬときに人生が空しくないと切り切れるでしょうか。それでは全てが揃っているように見える知り合いの方が母と同じ言葉を発する理由はどこにあるのかと私は又もや首をかしげるしかありませんでした。

絶対、私はそういう言葉は口にしたくない、それではどうすればいいのかとしばらく考え続ける間に、私がなぜ生まれて、何のために生きていくのかという問いに逢着することになりました。あ、これなんだ、私が生まれてきた理由を生きていく理由を、その価値を見出せ

ばいいのだ、私が死ぬ間際に私の人生はこういうものだったんだ、と一言で定義できれば私の人生が空しいという言葉は言わないはずだと思うようになりました。

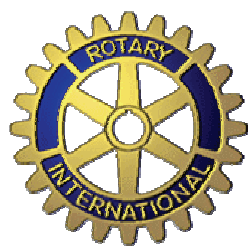
ロータリーの皆さんを見ながら、うちの祖父と祖母のことを思い出しながら何が価値のある人生なのか考えてみることになりました。誰かを助けようとするのは私の外にいる他人を助けるのではないこと、私の中にすでに入っている他人について私とあなたという境界は無意味なことだということも薄々感じています。皆さんの中で米山奨学生たちが我々に果たして感謝する気持ちを持っているのか聞く人がいるでしょうか。子供たちは我々を理解していないと言う人がいるでしょうか。私が申せるのは、米山奨学生や子供たちが皆さんについてよくわからないことがあるかも知れませんが、どこの誰かは見えないところで皆さんの言葉一つ、行動一つひとつを見ながら学び、どういうことが正しい生き方なのか胸の奥で静かな波を立てている人が確かに私だけではないだろうということです。また、私が祖父と祖母の写真を机に貼っておいて、大変なことがあるたびにお爺さん、お婆さん、私がここで何を学ばなければならないの？何を感じ取ればいいのかと聞き、心の中の支えとしているように、みなさんのお子さん、お孫さんたちもいつか、私と同じ行動を取る時が来るでしょう。

元々の原稿はここまでです。この原稿を作成後、私は恥ずかしくて二度と読まずにほっておきました。私はその恥ずかしさの正体が分かりませんでした。自分の話をするのに、自分の思いを伝えるのに何が恥ずかしいのか、そう思いながらも私はもう一度原稿を読む勇気が出せずにいました。最後だと思い、先ほど部屋に戻って勇気を出して読んでみました。そして私がなぜ逃げようとしたのか、自分の恥ずかしさの正体が何だったのか分かりました。私は自分のありのままの姿を出さずに、まともや自らを綺麗に包装して人々の前に立とうとしたのだ、これではないのに、これではないのに…。

私は実は日韓関係について言いたかったわけではありません。私は「人」について言いたかったのです。利己的で嫉妬深く幼稚で、自分の間違いは許しながら人の間違いは許し難いそういう醜い存在、私の中の矛盾がばれるか心配で強がって突っ張っているそういう姿、そして私と同じくいつ壊れるか分からない弱い人間の姿。自分の醜い姿に一度だけでも痛みを感じたことのある人であれば、そのため自分の骨の隅々まで苦痛を感じたことのある人であれば、他人のことを自分だけの裁判にかけてぐちゃぐちゃにすること、それが果たして可能なことでしょうか。少なくともそのような「人」を認めるのであれば、昨今の日韓関係における過激な論争は起こらないはずです。私が話したかったのは、他人が自分のような人だと感じられるのであれば、乗り越えられない紛争はなく、受け入れられない他人はいないということでした。問題は関係回復のため誰が先に手を振るのかということでしょう。ここにいる皆さんがお互いに手を振ってくだされば、私はその中で手を振ります。私、そのまっただ中に立って力一杯手を振ります。

ご静聴、ありがとうございました。





国際ロータリー第 2750 地区米山奨学委員会

<http://www.2750yoneyama.jp>
info@2750yoneyama.jp